

いま宗教学研究に何が求められているか

第19回国際宗教学宗教史会議世界大会 (IAHR 2005 TOKYO) 報告

望 月 哲 也
※ 武 井 順 介

はじめに

本年3月24日から30日の7日間、東京・品川の高輪プリンスホテルで第19回国際宗教学宗教史会議世界大会 (IAHR 2005 TOKYO) が開催された。21世紀に入って初めての本大会は、1958 (昭和33) 年に東京と京都で第9回大会が開催されて以来、日本では2度目の開催となる。本年は東京帝国大学に日本初の宗教学講座が開かれて100周年、日本宗教学会が設立されて75周年という節目の年であることから、日本招致が決められた。

全世界67カ国から1600人以上もの参加者が集い、大会テーマを「宗教——相克と平和」として、さまざまな「宗教」観、「研究」観にもとづく発表が約350行なわれた。そのほか、シンポジウム、映画上映、コンサート、芸術品展示など、学術発表のような「硬い」イメージのものだけでなく、「宗教」的な要素を含むさまざまな「催し」が世界各国から寄せられた。

多様な文化的背景を持つ人々が集まり、共通の大会テーマをもとに、どのようなことが議論されたのか、まず本大会の構成について記してみよう。本大会は、24日の公開シンポジウムを皮切りに、5つの全体会議と数多くのセッションに分かれて進められた。毎日1テーマずつ行なわれていた全体会議は、それぞれ「戦争と平和、その宗教的要因 (The Religious Dimension of War and

Peace)」「技術・生命・死 (Technology, Life, and Death)」「普遍主義的宗教と地域文化 (Global Religions and Local Cultures)」「境界と差別 (Boundaries and Segregations)」「宗教研究の方法と理論 (Method and Theory in the Study of Religion)」と題され、それぞれが本大会のサブテーマにもなっている。これらのサブテーマについて、各分野の指導的立場の研究者により発題・討論が行なわれ、かつ各パネルごとに個別具体的な問題関心にもとづく活発な研究発表と議論が行なわれた。すべての議論についてここに紹介することは紙幅の関係上不可能であるため、本大会において重要であったと思われるものを中心に、紹介していきたい。

1. 公開シンポジウム「宗教と文明間の対話」

本大会のテーマである「宗教——相克と平和」は、24日に開催された公開シンポジウムの内容によって、その意図しようとしているところをうかがい知ることができる。公開シンポジウム「宗教と文明間の対話 (Religion and Dialogue among Civilization)」は、パネリストに国連大学のハンス・ファン・ヒンケル、リオ・デ・ジャネイロ・カトリック大学のマリア＝クララ・ビンジェーメル、ハーヴァード大学イェンチン研究所の杜維明、関西大学の小田淑子を迎えて行なわれた。司会は本大会の実行委員会委員長であり、日本宗教学会会長（当時）でもあった東京大学の島藺進が務めた。

本シンポジウムでは、2001年9月11日に起こったアメリカの同時多発テロがキリスト教文明とイスラム教文明との「文明の衝突」であるという見方、さらに冷戦時代以降の様々な紛争の構図を宗教間紛争とする見方に対して、「本当に文明や宗教の対立が現代世界の主要な脅威なのだろうか」との疑問が呈され、同様の紛争に対して、武力攻撃とは違う仕方で行なわれてきた文明間の対話のもつ可能性と限界について議論がなされた。

国連大学のヒンケルは「宗教と文明間の対話——理解の文化を築くこと」と題して、イランのモハメド・ハタミ大統領の演説を引用しつつ、対話の制度化を

進めることが、後世への財産になると主張した。たとえば国連は、2001年を「文明間対話の年 (The United Nations Year of Dialogue among Civilizations)」とする宣言を採択し、そこでは文化多元主義と創造的多元性が積極的に認められた。ヒンケルは、このような宗教間、文明間の対話のためには自分が話をするという姿勢よりも、むしろ様々な状況を平等に受け入れ、聞く姿勢が重要であると述べた。さらにそこでは2者間よりも3者間、4者間のように多様性を吸収するための仲介者の存在が必要であると説いた。

ビンジェーメルは、「宗教と文明間の対話——ブラジルの挑戦」と題して、支配階層の信仰であるブラジル・カトリックとアフリカ系ブラジル人の伝統宗教との間の友好関係について報告を行なった。ブラジルは、その歴史からさまざまな宗教が混在している地である。その中での対立と協調の歴史を詳細に説明し、歴史を勉強しない共同体は、同じことを繰り返してしまうと警告した。さらに信仰を持ちながら他の宗教や過去の歴史を体験することは、より真実に近づこうとする巡礼のようなものと喩えた。

三番目の報告者である杜は、「対話的文明に向けて——公的知識人としての宗教指導者」と題し、グローバル化が進む現代世界の中で、すべての人々が参加できる共同体の構築、つまり世界市民という意識を持つことが重要であると語った。その際必要とされるのは、他者に対する理解と敬意であり、自ら話すこと (speaking) ではなく、相手に耳を傾けること (listening) も必要不可欠であるとした。さらに、杜は、現在を「第2の軸の時代」と位置づけ、西歐的メンタリティの脱構築と再構築をしなければならないともいう。これを具体化するにあたり各宗教的指導者に要請されることは、公的な知識人として、他の文明の人々にも通じる「世界市民」としての言語の習得であるとした。そのためには宗教の専門家としての教育ではなく、全人的なリーダーシップ・トレーニングが必要であり、宗教的指導者は現世的、現代的な問題に対する発言もしていかなければならないと主張した。

小田は、「民衆の宗教理解」と題して、他の報告者とは若干趣が異なる報告を行なった。小田は3者と同様、諸宗教の対話の意義は否定しないし、諸宗教

の共存を強く望んでいる。しかし現実には、宗教同士の対立は依然続いており、戦争や紛争は繰り返されている。このような状況の中、研究の場では「非常に洗練された」学術的な議論のみが行なわれていることに戸惑っている。様々なシンポジウムでの対話も世界平和に貢献しているかどうか疑問に感じるという。学術的な場、議論の場などで決まったことが、現状では研究者や宗教者以外の人々（「民衆」）に届いていない。届けるためには「学問的な『地球市民』としての対話」と「素朴なコミュニティでの言葉」の間にあるズレにどう橋を架けるかが問題であり、その際重要なのは、イスラムや仏教のような「生活様式としての宗教」についての知識が必要であると示唆した。さらに諸宗教を理解するには、いかに同じであるかだけでなく、何が違うか、なぜ違うかを知ることでも重要であるとした。

4者の報告は、それぞれ異なる仕方で文明間の対話を訴えたものであった。その内実は他者理解、他者を知ることの重きを置いたものといえるであろう。しかし、小田が報告するように、研究者間や宗教家間での議論、討論は実際に問題を抱えている社会や「民衆」には届き難い側面がある。難しい学術用語や難解な宗教的言語での語り合いは、その言語を身につけていない「民衆」には到底理解のできないものといえる。この言語を「民衆」に理解、解釈可能な言語に翻訳するのも研究者の仕事の1つといえるであろう。翻訳をスタートとした「宗教と文明間の対話」、これが現代の急務であろう。

2. 全体会議「戦争と平和、その宗教的要因」

全体会議の一つ「戦争と平和、その宗教的要因」の発題者は、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校のマーク・ユルゲンスマイヤーであった。ユルゲンスマイヤーは、日本でも『ナショナリズムの世俗性と宗教性』（1995、玉川大学出版部）や『グローバル時代の宗教とテロリズム』（2003、明石書店）などの訳書が出版されており、著名な研究者である。専門は、宗教暴力、紛争解決、南アジアの宗教と政治で、200本以上の論文と15冊の単著を発表している。

以下に、本全体会議の趣旨を抜粋してみよう。

今日、宗教こそが戦争を引き起こす主要な原因だとされることが少なくない。しかしほんとうにそうだろうか。宗教は、平和を実現する手段というより、むしろその妨害者なのか。宗教がどのようにして、どのような意味で、戦争にであれ平和にであれ寄与するのかを考察することは重要な課題である。考察は、思想のレベルでも、歴史的検証としても、なされなければならない。諸宗教は、戦争や平和をどのように意味づけ、価値づけてきたのか。そうした思想を諸宗教は、過去において、また現在において、どのように現実化してきたのか。この長く論じられてきた問いは、21世紀初頭という状況下で、新たに検証され、考え直される必要がある。

(大会プログラムより抜粋)

この趣旨のもとユルゲンスマイヤーは、「宗教戦争、テロリズム、そして平和」と題する発表を行なった。近年のグローバル化の流れの中での宗教的紛争や宗教テロリズムなどは、「善と悪との壮大な闘い」といった、宗教的言語をともなった宇宙論の闘い（コズミック・ウォー）になっている。これはイスラム過激派やオウム真理教にも当てはまり、ここに注がれる宗教的熱情はとてつもなく大きいため、解決はたいへん困難であると説明する。このコズミック・ウォーに対してアメリカのブッシュ大統領もまた、宗教的言語を用いて「テロへの戦い」を説明し、宗教的熱情をともなった戦争を遂行している。つまり、現代は宗教が政治化しているのではなく、政治が宗教化しているのであるという。ユルゲンスマイヤーによれば、宗教的想像力に付きもののこうした「戦争」のイメージを、どうすればスピリチュアルな次元に押し戻し、宗教が秩序と赦しと平和の使者となりうるのか、これがわれわれに突きつけられた難問であるという。さらに、このような状況下における宗教研究者の責務は、さまざまな宗教現象を「理解し説明できる」ことであるとし、日本の研究者にもそれを求めた。

これに対して指定質問者の南山大学の渡辺学は、宗教学の環境は大きく変容しており、現在では単なる学問の1領域だけでなく政治的・社会的問題をも含むようになった。そのため、現在の宗教学とそれに関わる研究者はオブザーバーとしてではなく、従軍記者のような事件への参加者となり、そこで何が起きているのか的確に示さなければならなくなったと説いた。

実際に、宗教と暴力、戦争と平和という問題は政治・社会問題化されており、研究者はこの問題について真正面から立ち向かっていかなければならない。ユルゲンスマイヤーがいうように、われわれ研究者は現在起こっている宗教現象について「理解し説明できる」能力を身につける必要がある。そしてその際には、渡辺がいうような「事件への参加者としての研究者」の立場で、問題の「真相」を的確に伝えていかなければならないのかもしれない。今後研究者に求められる能力の一面を考えさせられた報告であった。

3. パネル「宗教研究におけるライフヒストリー・アプローチの今日的課題」

本稿執筆者の1人である武井が組織したパネルについても触れておきたい。「宗教研究におけるライフヒストリー・アプローチの今日的課題 (The Life History Approach on the Present Challenge in Religious Studies)」と題した本パネルは、2001年に若手研究者によって結成された「宗教とライフヒストリー研究会」というライフヒストリー・アプローチの方法論的精練と宗教研究への応用を目指した研究会の参加者が中心となって組織されたパネルである。この研究会は、2002年の日本宗教学会、2004年のオーラル・ヒストリー学会においてワークショップを企画、開催し、宗教研究への新しいアプローチの提唱を行ってきた。そこで出された数々の問題に答えるかたちで、本会議でパネルを組織した。パネルの要旨を下記に記してみよう。

今日、多くの研究領域において、ライフヒストリー・アプローチが用いられている。この方法は、個人の内的意味世界を把握するのに適したもの

とされ、宗教研究においても、教祖や信仰者の極めて主観的な意味世界を扱う際に使用されることがある。

本パネルではこの方法を用い、4つの事例を提出する。まず、ある新宗教の二世信者のライフヒストリーから、彼の人生全体における脱会の意味づけを考察した事例、次に教団創始者のライフヒストリーを関係者の語りから構築し、彼の信仰の基盤を考察した事例、さらに一信仰者のライフヒストリーを宗教的・政治的視点から検討し、彼女の内的意味世界を多角的に考察した事例、最後に信仰者へのインタビューの場で聞き手の人数によって表出する異なるアイデンティティを考察した事例、である。

上記から、宗教研究におけるライフヒストリー・アプローチの方法論的・事例的課題を検討し、このアプローチの可能性を模索したい。

(大会プログラムより抜粋)

報告者は、東京大学大学院の塚田穂高、立正大学の竹村一男、同じく武井順介、そして最後に東洋大学大学院の寺田喜朗であり、レスポンドントは帝京科学技術大学の井腰圭介、司会は鈴鹿国際短期大学の川又俊則という構成で行なわれた。当日は、フロアーに数十人の研究者を迎えて活発な議論が行なわれた。

塚田は、「「2世信者」の信仰獲得の過程」と題し、手かざし系教団の2世信者に対して行なった聞き取り調査をもとに、1世信者のような熱心な信仰活動を行なわない2世信者の問題や可能性について報告した。2世信者が家族などの宗教教団内の相互行為を通して得られる知識や習慣と、さらに2世信者の宗教教団外での知り合いを通して得られるそれらとの間の違い。宗教が呈示するものと一般社会が呈示するものの狭間に立たされた2世信者の葛藤。このような状況にある2世信者は、いかにして信仰を獲得していくのか、ライフヒストリー・アプローチを用いた詳細な論考が報告された。

竹村は、「牧口常三郎の信仰と人生地理学」と題し、創価学会の創設者であり、さらに『人生地理学』という著作の著者である牧口常三郎が、信仰をいかに受容し、人生地理学を通してどのような教育を行なったのかについて報告し

た。報告では牧口の弟子や信者、そして牧口の教え子からのインタビューを通して、信仰受容は彼の人生地理学に由来するイデオロギーと理論の結果であることが詳細に示された。

武井は、「信仰者のライフヒストリーにおける解釈の多様性」と題し、共産主義を掲げる集団に所属していたある信者が、世界救世教という新宗教教団にいかにして入信していったのかという事例をとりあげた。同一の事例でこれまで数回考察を行なってきた報告者は、今回はこの信者の人生についての別の角度からの解釈を試みる。これまでは宗教的世界内の現象を宗教的世界内の言葉を用いて考察を行っていたものを、それとは異なる政治、思想史的ターム（「転向」）を用いて考察することにより、信者のライフヒストリーには多様な解釈が可能であること、またそうすることによって重層的な信者の人生の描写方法に厚みが増してくることを示そうとした。

寺田は「語りのコンテクストとライフヒストリー作品」と題し、戦前の教育を受けた台湾・生長の家の信者への長年にわたるライフヒストリー・インタビューの記録を用いて、「ライフヒストリーの信頼性」について報告した。ライフヒストリー・インタビューを通じた語りは、しばしばその場や対話の状況に拘束された性質を持つといわれる。つまり、インタビューでの語りは、再現可能性がなく、実証的ではないため、信頼性がないといわれるのである。しかし、そのような中でも一貫した語りは存在しており、その意味で実証研究に耐えうるデータをライフヒストリー・アプローチは呈示している。寺田は自らの研究プロセスを開示し、再検討を加えることによってそのように結論付けた。

上記4者の報告では、事例や内容は全く異なるが、ともにライフヒストリー・アプローチを用いているところでは共通性がある。ライフヒストリー・アプローチとは、ある個人が時間的経過を踏まえ、自らの経験や社会に関して解釈した記録を用いて、研究者が自らの問題意識に沿って意味解釈していこうとするアプローチである。これは対象者の人生をホリスティックに捉えようとする際に有効なアプローチとして、社会学、人類学、歴史学などで用いられているものである。宗教学においても、すでに用いられてはいるが、ライフヒストリー・

いま宗教研究に何が求められているか

アプローチを標榜している研究者の数は、そう多くはない。

レスポンドの井腰は、ライフヒストリー・アプローチは、対象者の主観的な意味付けを把握するのに適したアプローチであるため、信者以外には理解しづらい宗教のさまざまな奇蹟体験、特に入信という複雑な現象を把握、理解するのに適している、という。

このような、信者の主観的な意味世界を的確に描写できるライフヒストリー・アプローチの可能性は、どこにあるのか。本パネルでもある程度の解答が出されたが、最終的な成果は本年10月刊行予定の『ライフヒストリーの宗教社会学』（ハーベスト社）にまとめられる予定である。

おわりに

7日間にわたる会議は、30日の総会・閉会式をもって幕を閉じた。新会長にはアメリカ・テネシー大学のロザリンド・ハケットが、副会長には立教大学の月本昭男とオランダ・ハーグ社会科学研究所のヘリー・テル・ハールが選出され、承認された。

本大会の参加者は1600人以上。過去の大会の参加者が多くても700人であったことを考えれば、際立っているといえる。その中でも、発展途上国といわれる東・東南アジア、中近東、東欧、アフリカ、中南米などの国々からの参加がこれまでも増して多かったように見受けられる。その意味では「国際宗教学宗教史会議」という名に一層相応しいものになったといえるであろう。さまざまな国からの研究者が共通の場に参加し、議論を行なう。長らく欧米中心といわれてきた宗教研究の脱欧米化を目指し、新たな基盤を創り上げるうえでは大切なことである。

では、われわれは本会議を通じて宗教の「相克と平和」への解答を打ち出せたのであろうか。確かに現象の詳細な記述は各々の報告から出されたように思われる。ただ、その根本的な解決についてはやっとな問題点が呈示された段階にすぎない。われわれの前にはまだ課題が山積みである。その点を把握できた

けでも、本会議は有意義なものであったといえるであろう。

※本学文学部非常勤講師（宗教社会学）